

新春スペシャル まなび場 天声人語

みんなで挑む 高め合う

天声人語を題材に学びを深める「まなび場 天声人語」。その中の「見出し講座」には、毎回多くの方から投稿が寄せられています。学年やクラス単位で挑戦している学校に、取り組みの様子をたずねました。（矢島由利子）

クラスで磨こう 語句と表現

見出し

埼玉大教育学部付属中2年

「天声人語を25分で読んで、見出しを書き込もう」。昨年11月下旬、埼玉大教育学部付属中学校2年の国語の授業冒頭で、甘菜裕貴教諭が呼びかけた。生徒が立ち上げたパソコン画面には、遠隔会議システム「Teams」で共有した書き込み欄が映っている。クラス全員で見られる。「カニカマの50年」がテーマの11月14日付を読み始めた。手元の紙に案をメモしたり、類語を調べたり。



自分で考えた見出しについて、グループに分かれて話し合う生徒たちと甘菜裕貴教諭＝2021年11月29日、さいたま市南区、井手さゆり撮影

「なかなかに浮かばない様子の生徒には、甘菜教諭が「困った人はチームズを見て、他の人のをぜひ参考にしてください」と声をかけた。10分ほど経つと、ぼつぼつと見出しが書き込まれ始めた。「これ、うまいね」と甘菜教諭が挙げた見出しは、「人の思いに『練られた』おいしさ」。遠藤亮太さんは「練り物と、人の思いが練られた点を表現した」と説明した。甘菜教諭は「この意味がかかっているね」。

甘菜教諭が見出し作りを授業に導入した狙いは、要約の練習だ。「正確に読み、目的に応じて要約するのは訓練が必要です」。生徒は、1年次から「語彙カード」を書きためている。「言葉を吟味するのは楽しいな、と思ってもらえるのが一番」と話す。クラスで見出しを共有しているのに、まったく同じ見出しは見当たらない。「書き出しが苦手」という山本凛々子さんは、友達の仕事を見て、こんなやり方もあるんだ、と考える手助けにしているという。けれども「似たのは書けない」と生徒たちは口をそろえる。互いに語句や表現を磨きながら、納得できる作品を作っていく。「みんなでやるからおもしろいよね」。



優秀作を選考する野村周・コンテンツ編成部長（中央）ら

見出し 16日まで募集中

「見出し講座」で現在募集中のお題は、12月12日付の天声人語です。応募は専用サイト<http://t.asahi.com/manabibatenjin>へ。新聞型のワークシートも、専用サイトからダウンロードできます。



今までの「見出し講座」はこちら<https://www.asahi.com/topics/word/manabibatenjin>からQRコード。編集者が解説するポッドキャストも聞くことができます。

正確な読解か・引きつける言い回しか… 選考会では

毎月の選考会では、講評「イイネ！」を担当する野村周・コンテンツ編成部長と、朝日新聞の編集者数人が、投稿の中からそれぞれ選んだ見出しを優秀作候補に挙げ、検討しています。天声人語の筆者が見学に来れることもあります。文意を正確につかんでいるか。人を引きつける言い

回しで言いたいことを表しているか。様々な視点でつけられる見出しですが、この二つのポイントは外せません。魅力的な表現でも、文の内容からずれている見出しは選外です。文中にない自分の言葉で的確に言い切った見出しには、感嘆の声が上がります。韻を踏んだり、リズムよく組み立て

たりしている見出しも、高評価です。また、寄せられたメッセージを読むことも、選考時の楽しみです。「家族みんなで作りました」「学校で選抜した見出しを送ります」「トイレの壁に貼ってじっくり考えました」……。なるほどこんな取り組みもあるのか、と驚かされます。

いろいろな視点 ビジネスにも

初回の昨年7月から投稿を続けているのは、東京都立第一商業高校2年B組だ。担任の井原祐美教諭が、ビジネス課題の解決案を考える授業の課題で出している。松本大聖さんは「本気で優秀賞を目指している」と、キーワードや語感にこだわって考える。井原教諭の狙いの一つは、苦学する生徒が多いという大学入試の小論文対策だ。「見出しを考えた理由」を書くには、読解力と自分の意見が必要だが、「思っていることを短い文章に書き起こすことが難しい」という。それでも、半年間続ける中で「要約に慣れた」と感じる生徒も増えてきた。



課題が配信されスマホで一斉に確認する生徒

さらに、生徒が感じているのが、いろいろな視点から読むことの大切さだ。文章のどこに焦点を当てるかで、見出しは変わる。毛塚美咲さんは「ビジネスアイデアを考える上でも、いろいろな方向から見る必要がある。多くの視点から見ることによって」と話す。

教科書の話 新聞でなるほど！

大分県佐伯市立鶴岡小5年の5年生は、新聞型のワークシート「写真」を使って取り組んでいる。シートには取り組んだ感想を書いたり、絵を描いたり。週末の宿題として配られたシートには、濱田一樹教諭が「果てしなく必要」「原油高」などの言葉の解説や漢字の読み仮名をつけた。それでもわからないときは、は、「お父さんやお母さんに聞いて、一緒に新聞を読む機会になった」という子どもがとて多い。「必要と供給」を振り返って説明すると、児童も納得した様子。「習ったことは教科書の中の話ではなく、今の社会とつながっている」ということを意識して解説しています。



の時間で内容を深掘りした。たとえば「カニカマ需要」という言葉。濱田教諭が社会で学習した「需要と供給」を振り返って説明すると、児童も納得した様子。「習ったことは教科書の中の話ではなく、今の社会とつながっている」ということを意識して解説しています。

天声人語

あの日探訪

まなび場天声人語は、天声人語を対訳形式で読む「英語講座」(第1月曜)・過去の天声人語を掲載日の紙面とともに再掲する「あの日探訪」(第3月曜)・「見出し講座」(第4月曜)です。

英語

「あの日探訪」で掲載する過去の天声人語は、読者のみなさんからも募っています。兵庫県宝塚市の宮城正時さん(74)は定時制高校3年だった1967年3月、朝日新聞の声欄で全日制出身者との不当な就職格差をなくすよう訴えました。直後に励ましの投稿が声欄に載って感激していたところ、1カ月後に天声人語も定時制高校生の就職を取り上げました。宮城さんは「本当に驚きと感動でいっぱいになったことを50年以上経った今でもはっきりと覚えています」。

「カニカマの50年」がテーマの11月14日付を訳した「Imitation crab builds a global following despite its humble origin」など、朝日新聞の英語ニュースサイト「The Asahi Shimbun Asia & Japan Watch」から英語表現を学びます。対訳形式で理解が深まります。

宮城さんが読みたい1967年4月11日天声人語

就職の機会を与えてほしいと、毎年のように定時制の卒業生や関係者からうったえの声があがられる。春ごろになると新聞の投書欄には、胸をうつ若者の投書がよく出るが、差別の力はなかなかなくならない。経営者、雇用の側に、定時制卒業生を軽視する傾向が残っている。大手の企業で、定時制の卒業生に入社試験の機会を与えていないところが多い。入社試験も受けさせず、はじめから差別してかかる理由は、関西での調査によると、「定時制は一般的に全日制よりも能力が劣っている」といわれているから。「よその会社でも採用していないから」との答えが圧倒的に多かった。さうだ。このうまい理由で就職を拒否されては定時制の卒業生も無念だ。さうだ。人材を求め出してしまう企業の方も損をするだろう。社会的に不公平であり、社会的な損失ともなる。はたして定時制卒業生の学力が全日制に劣っているかどうか、実際に見てみるために、受験資格は与えるべきではなからうか。働きつつ学んだ若者たちから、あるいは学力の点では不十分ながらも目につくかもしれない。しかし、それを補ってあまりある長所がありはせぬかと考えられる。つらい条件にたえて、働きつつ勉学をやる強い意志や、向上心だ。根性のある人間。を産業界は求めているが、定時制を卒業するには、よほどの根性を要する。「定時制の卒業生は他の仕事ですでに染まっているから」ときこう雇う者もいるが、経験と苦学を積んでいるクラスの面もあるはずだ。定時制の卒業生を就職時に差別待遇するのは、「実力主義」の時代にも逆行することである。経営者の再考をもとめたい。定時に学ぶ人たちは、全日制に劣る学力をめぐめ、なほ努力してもらいたいものだ。

1967・4・11